

今市文明



●著者 今市文明 (いまいち・ふみあき)

1948年鳥取県生まれ。山梨県都留文科大学卒業後、流通業界、化粧品、呉服、寝具、インテリア業界などの専門紙記者を経て、86年フリーに。現在、小売店に対する情報活動を展開するとともに、高齢者問題のジャーナリストとしても活躍中で、「シルバービジネス経営戦略」(「商店界」・誠文堂新光社)など雑誌への執筆、講演など多数。

住所：埼玉県越谷市南荻島3514-3 電話：0489-77-5813

NDC673

高齢化社会の応援ビジネス

発行日 1990年2月1日 発行 検印省略

著者 今市文明

発行者 小川茂男

発行所 誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町1-5-5

〒101 振替 東京7-6294

☎03-291-3171(編集)

03-292-1221(営業)

印刷 広研印刷㈱

製本 ㈱若林製本所

定価はカバーに表示してあります。

万一落丁、乱丁の場合はお取替えいたします。

© 1990 Fumiaki Imaichi Printed in Japan 無断転載禁止

ISBN4-416-79001-5

誠文堂新光社の雑誌 商店界・ブレーション・アイデア・ポートフォリオ・子供の科学・初歩のラジオ・MJ無線と実験・天文ガイド・農耕と園芸・ガーデンライフ・フローリスト・囲碁・愛犬の友・月刊 芽・CHROMA・Vegeta(ベジタ)

今市文明

高齢化社会

の

応援ビジネス

はじめに

私は、一〇年ほど前に二人の身内を失いました。一人は妻の祖母で、もう一人は私自身の父親です。この二人の死は、私が物心ついてから初めて体験する出来事でしたから、たいへんショックを受けたものです。

妻の祖母の死は、全く突然でした。八四歳でしたが、少々耳が遠い程度ではかほども悪くなく、いつ行っても縁側に座って、ニコニコと私たちの話に相づちを打ってくれていました。ですから、その祖母の訃報を聞いた時には、まさきに信じられないという思いがしたものです。

でも、臨終の様子を聞いて、私は大きな感動を覚えました。祖母は、息子、つまり私の妻の父親に、あの縁側で肩をもんでもらいながら、気持よさそうに静かに息をひきとったそうです。それはまるで、夢を見ながら眠っているような臨終だったと言います。

八四歳といえば、天寿を全うしたといえる年齢です。それも、こんな形で臨終を迎えれば、本人はどんなにか幸せだったにちがいありません。それ以上に、義父は自分の母親に最後にして最高の親孝行をしながら見送ったわけですから、これまた本望だったはずです。

私たちも、もちろん悲しいけれども、なにか暖かい、安らかな気持ちになったものでした。そのすぐあとに、今度は私の父が亡くなりました。まだ六三歳でした。ガンに冒され、病院と自宅で一年足らず寝込んだあと、あっけなく帰らぬ人になってしまったのです。この時は、人生のはかなさというものをいやというほど思い知らされました。

それまで働きづくめで働いてきて、子供たちもようやく成長し、さあこれからという時の死でしたから、本人は、どんなにか残念なことだったろうと思います。そしてまた、私たち兄弟も母親も、残された者全員が、これから楽にゆつくりと生きていつてもらおうと思っていた矢先だっただけに、その悲しみは一層深いものとなりました。

しかし、これも父の寿命だったのです。周囲をほとんど煩わせる暇もなく大急ぎで逝った父のことを今思うと、生前、何事も自分の思い通りにいかないと気がすまなかった父らしくて、むしろ潔い人生ではなかったかと思えるのです。

『終わり良ければすべて良し』という言葉があります。私は、人生八〇年、高齢化時代のこれからにあつてはこの、『終わり良ければすべて良し』の人生観こそ必要だろうと思います。第二の人生ともいえるべき長い老後をだれにも迷惑をかけることなく、自分らしく明るく元気に生きることこそがこれからの時代を生きる一人ひとりに課せられた最大のテーマです。

その意味で、祖母の死はすばらしい生き様であつたし、父の死もそれからの人生に悔い

は残ったにせよ、潔い生き様であつたと思われます。

私も、あと二〇年もすれば、父が生きた人生と同じくらいを生きることになり、そのあとも元気に父の分まで生きたいと願っています。そんな生き方を応援してくれるビジネスとは……の思いで本書をまとめました。

これからシルバービジネスを考えてみたいと思っておられる方々はもとより、明るく元気にこれからの高齢化社会を生きていこうと願う多くの人々のなんらかの参考になれば幸いです。

著者

はじめに 3

序章

わが国の高齢化社会とは 12

第一章

二一世紀には一四〇兆円を超えるシルバー市場 22

急がれる高齢者対応のマーケティング 26

お元氣シルバーを応援するビジネスチャンス 30

第二章

家族や友人との交流に胸弾ませる ワクワク・シルバー

コミュニティビジネス 40

旅行ビジネス 47

情報・娯楽ビジネス 58

住宅ビジネス 70

第二章

仕事や趣味に生きがい燃やして輝く瞳 キラキラ・シルバー

人材派遣ビジネス 76

カルチャービジネス 81

第四章

健康こそ宝、終生元気に暮らしたい イキイキ・シルバー

スポーツビジネス 94

健康食ビジネス 105

快眠ビジネス 111

第五章

いつまでも若い気分で青春現役 ルンルン・シルバー

ファッションビジネス 116

美容ビジネス 125

結婚情報ビジネス 127

第六章

安心安全を保障され快適に暮らしたい ラクラク・シルバー

体力低下補完ビジネス 132

積極ライフ支援ビジネス 140

セキュリティビジネス 147

第七章

自立シルバーの最後の楽園「有料老人ホーム」

リッチな高齢者の「終生」を預かるビジネス 158

入居者の意識と実態 163

個性で差別化図る有料ホーム 166

第八章

不幸にも寝たきりになってしまったら 在宅ケアビジネス

深刻な社会問題を背景に生まれたビジネス 174

質的競争時代の在宅ケア・入浴サービス 178

顕在化市場の中で急増する介護用品店 183

第九章

第二の人生を不安なく過ごすための生活設計ビジネス

人気急上昇「介護保障付き終身保険」 192

経済的不安を解消する「個人年金」 196

終章

お元気シルバーを応援するための五つの視点

高齢者を応援するのはネクラではない！ 202

応援の基本マナーはやさしい気配り 204

まず、男性の応援者になろう 206

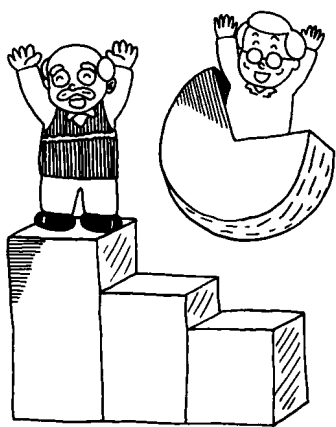
「終わり良ければすべて良し」の応援者に… 208

二一世紀に花開く応援ビジネス 210

おわりに 212

序章

わが国の高齢化社会



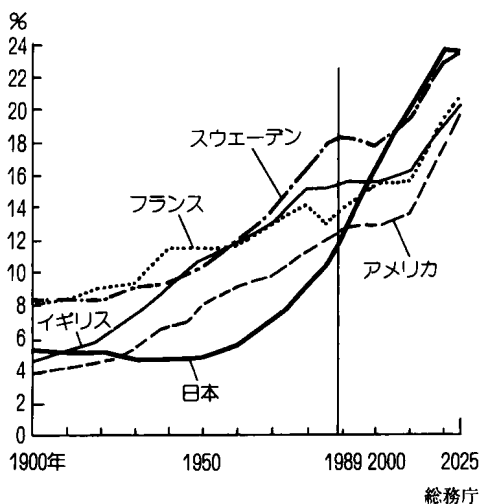
わが国の高齢化社会とは

「人生八〇年時代が来た」「高齢化社会を迎えた」などと最近よく耳にする。では、一体わが国の高齢化社会とはどんな社会なのか。まず最初に、各種の統計資料をもとにわが国の高齢化社会の実態をみておこう。のっけから数字の羅列で恐縮だが、少しの間なので辛抱して読んでいただきたい。

国民の四人に一人が高齢者となる社会……

「人生八〇年」という場合の根拠は、国民の平均寿命にある。平均寿命というのは、現在零歳児の赤ん坊があと何年生きられるかを数値で示したものである。この平均寿命が一九八八年には男七五・五四歳、女八一・三〇歳であった。この年は、前年に比べて男が〇・二〇歳、女が〇・

主要国の65歳以上人口割合の推移と予測

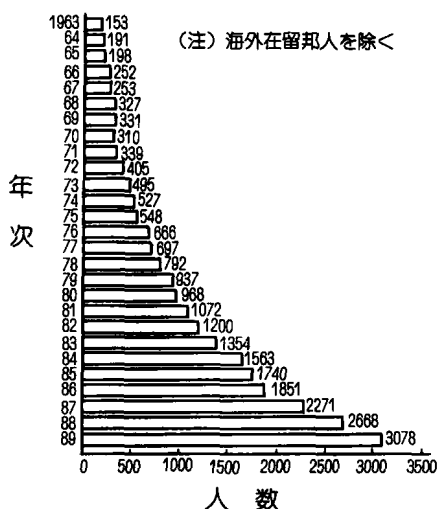


一〇歳とわずかに下がったものの、これは一過性の現象であり、今後ますます伸び続けることが予想されている。わが国の平均寿命を諸外国のそれと比較しても、女はアイスランド、フランス、アメリカなどを抜いて世界一に、男もアイスランドとともにトップクラスにあり、まさにわが国は世界一の長寿国といってよい。

では、実際の高齢者の人口はどれくらいなのか。個々人にとっては異論もあろうが、本書では、一応六五歳以上を高齢者とみなしたい。この六五歳以上の人口が一九八九年九月現在で一、四二九万人である。総人口に占める割合は一・六％、一〇人に一人強が六五歳以上の高齢者ということになる。

出生率の低下等の要因もあって、高齢化の速度がきわめて早いのがわが国の特徴だ。高齢者の人口比率が一九五〇年代後半には五％台であったものが三〇年後の一九八五年に一〇％を超え、今後二〇〇〇年には一六・三％となり、戦後のベビーブーム世代、いわゆる団塊の世代が高齢者の中心となる二〇二五年

100歳以上の長寿者年次推移



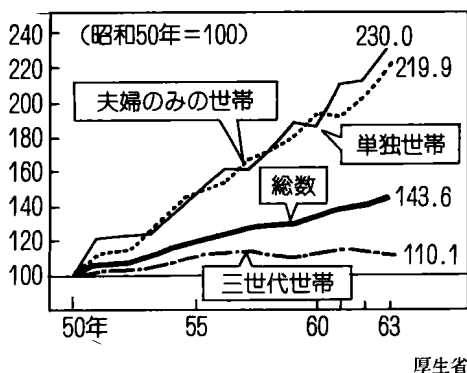
厚生省

には二四・五％に達するものと推定されている。ちなみに、二〇二五年における諸外国の高齢者の人口割合は、スイスの二三・八％をトップに西ドイツ、オランダ、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、ベルギーなど、いずれも二〇％前後と推定されている。日本の場合、そのいずれよりも高く、国民の四人に一人が高齢者という、これは世界史上かつてない超高齢化社会の出現といえる。

問題はそのスピードである。日本で高

齢者の人口比率が七％になったのは一九七〇年であった。高齢者の人口が七％を超えた社会を一般に「高齢化社会」と呼んでいるが、これが二倍の一四％になるのは一九九五年と予測されている。この間二五年である。イギリス、西ドイツがともに一九三〇年に七％となり、一四％を超えたのは一九七五年であった。それでも四五五年間を要している。アメリカは一九四五年から二〇一五年の七〇年間、スウェーデンは一八九〇年から一九七五年の八五年間も要し、フランスにいたっては、なんと一八六五年から一九九五年の一三〇年間もかかるのである。日本がいかに超スピ

世帯構造別にみた65歳以上の人のいる世帯数の推移



ードで高齢化の道を突き進んでいるかがわかる。

では、増え続ける高齢者の年齢層をもう少し細かく分析してみるとどうなるだろうか。結論的にいって、七五歳以上の後期高齢者が急増することである。後期高齢者の総人口に占める割合は、一九八五年には三・九%であったが、これが二〇〇〇年には六・四%となり、二〇二〇年には一一・三%にまで急上昇すると予想されている。つまり、これから三〇年後にはほぼ国民

の四人に一人が六五歳以上で、そのうち半数は七五歳以上という社会が到来することになる。毎年九月一五日の敬老の日に表示される「長寿番付」を見ても、例えば一九八九年の場合、八五歳以上の高齢者が一〇七万人と、すでに一〇〇万人を超え、一〇〇歳以上の長寿者も三、〇七八人（男六三八人・女二、四四〇人）と、二〇年前と比べて一〇倍にも増えており、長寿国化の進展を物語っている。

また、高齢化の地域差が激しいのもわが国の特徴の一つだ。これは、多くは人口の都市集中、とりわけ若年層の都市集中による過疎・過密の問題に起因している。都道府県別に高齢者の人口比率をみると、鳥根県の一六・